小説の書き手のための実践的創作企画

発案者：イコ

１．目的

いかにすばらしい考えや、豊饒な世界を頭の中にもっていても、あなたが書き手である限り、書かれないものをみんなが読んで評価するわけにはいかない。書きあぐねている人はまず「己の考え」や「世界」をきちんと文字にすることができた先人から学び、とにかく書いてみる、これが必要なのではないかと思い、企画を立ち上げた。

**１行目が書けない人には、スタートラインをこえるための荒療治として。**

**書いても書いても手ごたえが得られない人には、壁を突破するための思考と実践の時間として。**

　twitter文芸部には、こういう機会があまりにも乏しかったのではないか。創作に還元できる、有意義な切磋琢磨の場となれば幸いである。

２．内容、方法

　３つほど考えてみた。（参考文献：清水良典『あらゆる小説は模倣である。』）

**（１）1行小説**

　チャットで集まる。集まったメンバーで順番に、お題を出す。制限時間は10分程度とする。お題に沿って、これは詩歌でなく「小説」であると言えるものを、1行で提示する。タイトルをつけてもよい。Twitterに、twitter文芸部の1行小説秀作集として、発信するのもよいだろう。（その程度の恥ずかしさは、作者であれば乗り越えなければならない）

たとえば、この方法を提案している清水良典が、『あらゆる小説は模倣である。』という本の中で、次の小説を提示している。

・スカルラッティが仇となり

「サン・ホゼで、一間きりのアパートにヴァイオリンの稽古をする男と住むのは、ひどく難しいことよ」空っぽの拳銃を渡して、彼女は警官にそういった。

（リチャード・ブローディガン／藤本和子訳『芝生の復讐』）

**（２）作家の文章を作りかえて自分の作品にする。**

　やはりチャットで集まる。集まったメンバーで順番に、自分がすばらしいと思う作品の文章を抜粋して提示する。（1行～数行程度）メンバーはそれを、文章の構造はそのままに、自分の作品にすっかり作りかえる。前の文章の影響を受けていると分かる人には分かるが、きちんと自分の作品になっているものをすぐれている、とする。

たとえば、次の文章を作りかえるならどうする？

　　私は絶えず不安と焦燥になやまされている。……これは云い現しようのない感じで、強いて云うならば、奥歯が痛みはじめる直前に起る痒みと、最もやわらかな羽毛で足のうらを撫でられているようなクスグッタさとの混り合ったものを全身に感じているのである。多分これは私の脊骨が悪いせいであろう。病気で犯されて変型した脊椎が、どういう具合にか脊髄を刺戟しているのであろう。……だがこんな説明はどうでもよろしい。こんなことをいくら明細に、いくら科学的に説明されたって私自身にはどうなるものでもない。

（安岡章太郎「蛾」）

**（３）絵画を描写する。**

　結局すべてチャットで集まる。ネット上に転がっている絵画をひとつ見繕う。その絵画に描かれている人や風景を「小説」として表現し、断片を公開する。表現の仕方は自由。なるべくみなの発想が湧くような素材を選ばなければならないと思うが、逆に、ピエト・モンドリアンの絵画のような、とりつきづらいものから表現を導き出すのも面白いかもしれない。

　例：モンドリアン、ブリューゲル、ムンク、ゴーギャンなど

３．くわえて

いかがだろうか。このイベントでできた作品がtwitterのタイムラインや、『月刊twitter文芸部』に掲載されることになれば、twitter文芸部というサークルの、書き手への貢献が外部にもアピールできるのではないか。また、絵画の描写や作品の作りかえなども、巧妙に行えば、じゅうぶん公募作品として通用するものになると思うのだ。

この試みに乗っかってみたいと思う方を募集する。